

神名帳標目私考 坤

1752  
ノ  
1-2

新治十九年

○

国内神名帳トシテ諸國ノ地名を以テ國内の神社と記シ

柱指トシテ載ルモノハ此書多クシテ今こつり世に遺存

おのまじく尋求して得たりハ

和泉国内神名帳 首々々題せり奥々石神名帳目文鳥明神  
田所出たり明應元年の写本也書入り

尾張国神名帳 卷首々參照国内神名帳改文治丙三月日宜命狀因  
中該神皆増立為天下安穩御祈禱とありて奥  
治三年書写の奥書アリ應永  
元九卷の奥書アリ異本アリ

參河国神明名帳 卷首々か  
題せり

駿河国神名帳 卷首々駿河國語郡中  
題神大神神名帳アリ

伊豆国神名帳 題名らく伊豆国三郡内神名帳更々書写せり神階起り題せり  
後入りのちこよと題せり奥々康永三年辛亥三月廿

止日在鹿  
判りあり

新加原文化会館  
33.7.30 和  
35041

175.2  
18  
1-2

美濃国神名記 卷首より題あり天文十  
九年字より由奥書あり

上野国神名帳 本書題名より永仁六年二月廿五日古本の損より  
ありて惣社經藏寺泉龍院蔵あり由奥書あり

若狭国神名帳 本書題名より諸国の例よりありて柿十回人の書より  
神名帳よりありて打りてありて名付よりあり

紀伊国神名帳 本國神名帳よりありて本南海道紀伊国神名帳よりあり  
と書あり異書より寛元三月下旬よりあり年号既より

隠州神名帳 下四郷社有品陸州神名帳  
一巻あり一巻首より記あり

筑後国神名帳 首より題あり尾より天慶七年四月  
廿日守吉志簡称勅録並上の解あり

合して土部ありて以書名正しく其国神名帳より

上より奉りて筑後守の進上の帳より題名をの外より其例

より題名より陋仄て決むる 合書物語陸奥国より其国内の神名帳と  
もに神名帳よりありて文あり下に列して文あり

と公より神名帳より奉りて 一巻あり一巻首より記あり  
一巻あり一巻首より記あり

名ありて後より書ありてとのありて但りて其書  
の事といひて式の神名帳よりぎりハルも上より奉りて  
むりりの例より進上りて国内神名帳より上りて其各  
神名帳の事より考りて古諸国の守其国内の官社より  
免然りぬ神社より正し書載りて公家より上りて書り  
て其神社より五月の朔日幣と奉り恒例よりてを朔幣と  
稱りて国守位国より下りて先を諸社と持り巡り例  
ありて聞きりて然考りて由りて筑後国三升郡府中  
高良玉垂守神社の大祝の家藏傳りて其国の神名帳の  
後より天慶七年の国守の解状より載りて右太宰府去三

月四日符今月三日到來。你件諸神位記案依天  
慶四年九月十日同五年六月廿五日兩度官符  
旨可寫進狀仰下頻了而多送年月于今未進然  
間重被太政官去年八月廿二日符今年二月廿三  
日到來你檢事意件神名帳造進既有其期況太  
政官去年九月下彼府符你管國島神名帳悉以  
朽損難可據勘宜仰管國島甲令注進者而于今  
不進府之緩怠責而有餘大納言正三位兼行右  
近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣實賴宣奉  
勅宜仰彼府神名本位慥以勘錄令言上之者府

宜兼知依宣行之者方今彼國每官符到仰下頻  
也而徒有下知之宮更无寫進之勤已依國案緩  
怠責口府司之不勤國宜兼知件諸神位記案并  
神名帳等早速進上若其本位記散逸不存叙位  
年月依官符旨改口據具注言上不得重怠者今  
檢案内高良玉垂命神豐比咩命神並二前御神  
記適納國底足後代之鏡仍詳注叙日無寫位記進  
上如件但至諸神或國司商量奉授禰位或位記紛  
失不知叙日如此之類唯錄當階及神名同以言上  
以解天慶七年四月廿二日守從五位下古志宿禰

公忠之  
北押 正六位上行 掾 泰宿祢トス其帳之首

神名帳と題し借從五位下多良男神借從五位

下大多良咩神已上二前前司守和朝臣利親在任之

時去延喜二十三年三月日奉授位中次御井郡

六十所正一位高良玉垂余神延暦十四年五月九日始

奉授從五位下中寬平九年十二月三日奉授正一位以

上勅授位記中借從四位上斯礼賀志命神之右神以

元慶八年四月四日奉授下の文の例に依りて正六位上時

吏依其神驗昭然延喜十五年五月十三日奉授借從

五位下以同二十年十二月十一日奉授字從四位

下當時守吉志宿祢公忠又感其神驗之明以去天慶

六年五月十九日奉授借四位上借從五位上朝日

豐盛命神下以上八前元慶八年四月四日奉授正六

位上延喜十五年五月十三日奉授從五位上と初

記但但元慶四年借位授奉と尋常之位と公家

奉授之位也或借某位と時吏奉授位なり

中但位記紛失不知叙日と注り本言と奉朝

末釋載と天延二年十一月菅原文時朝臣の姿狀

初持内史之時即奉仕五畿七道諸神位記事名

号之訛階級之謬獨自所考正と逾六十餘社と

取位記中文字野行  
正六位上  
正六位下  
正六位上



正徳元年...  
陸奥守...  
維叙...  
陸奥守...  
正暦二年...

先件の物語集乃文のつきに而北間安方中将ト云人  
坂田守成テ下を問云々ト云下任の事ハ本朝無記  
長徳元年九月廿七日の日に陸奥守實方朝臣令奉勅  
赴任云々ト云又田村將軍坂田守成ニテ云々  
云々坂田村麻呂大宿禰の弟ト云<sup>延暦</sup>  
十五年正月廿五日任陸奥出羽按察使無陸奥守十  
月甲辰兼鎮守府將軍ト云々維叙の陸奥守ト任  
さす時ハいづ書云及及バト陸奥の二任五年早  
ク長徳元年ト安方方の交替ト云下国セシト云  
ク時ハ維叙の下国ト正暦二年ト云然<sup>レ</sup>に廳官ノ詔

田村將軍の任中の事ト二十年能成を奉<sup>レ</sup>マシ侍メト  
い<sup>レ</sup>ト推考ト云ハ田村麻呂の守ト任<sup>レ</sup>ト云延暦  
十五年より正暦二年までハ百九十五年ト云二十年ト  
い<sup>レ</sup>ハ暗記ト云ト云言トモベ<sup>レ</sup>然トバ件の延暦十  
五年の比より国守の神持朔幣を廢<sup>レ</sup>ト云神社<sup>ハ</sup>延  
喜式の成も延長五年より凡六十年バウの後正暦二  
年の比より及ぶを然<sup>レ</sup>衰<sup>レ</sup>ト云神社<sup>ハ</sup>ト云ト云官社ト  
云ハあ<sup>レ</sup>よりト維叙の更ハ朔幣を奉<sup>レ</sup>神名帳ト入<sup>レ</sup>  
奉<sup>レ</sup>ト云前<sup>ハ</sup>田村麻呂の傳<sup>レ</sup>ト云ト再<sup>レ</sup>再<sup>レ</sup>  
ト云ト云神名帳ト云ト云上<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>ト云ト云神名

式に収るるも官帳はあつた各国内に其国内の官社止始  
国廳に知えり。都りの神社と郡別の書載せ其神階とし記す  
とのまじりあつた国内の神名帳（こまじり）但し本等々玩前  
乃神名帳中に官符勘文等の赴きもて推考す。国内の神  
名帳は本位借位の免別なく記せらるるべの例しえり  
ま。今世は道も国内の神名帳（まじり）とて官社とて  
あやも神号と称せしむる神位と記せしむる推考す  
かの筑前神名帳は本位と借位と別れ記せる。官符の旨に  
隨ひて殊々異なりと思はるるべし然るに並へし国  
内の神名帳も神位は本位借位の免別なく記せらるる

ま。其別と今知べき由る。かの筑前より奉る。その国内  
の神名帳の注文す。その官符解状の赴き、（まじり）国宰の緩急  
ありてて天廢の比もさうり混らるるつと。もとより後  
の世に混多りぬべきとわして知す。やと神号の式の神名  
帳もと字の異々々ある。はと。其国よて書らるる。ま  
はまとのせらるる。神名帳も異々々書らるる。稀はハ式の神名  
帳も。神号のまじりもある。後その国内よて唱のつり  
中に記せらるる。思はるる。又其記す。比へて瘡多かり  
も有ぬ。又佛さるる。あやも神名も其趣し。官符神  
中。官知神。未官知神。別記す。まじり。官符神。延暦の大神。官符式。帳らと  
も。御あり。官知神。神。官。階。例。種。り。一。種。り。未官知。神。の。まじり。



所謂本知神也恒の警例に及ばず神祇官職を主と稱すべし其の足利の年の解状に於て  
伊豆國今も在處に概して其の國守の職官あり者も子孫なりし所永二年在處に奥書  
其國に神祇官と持傳へり今世より本とて字傳へり今世より在處に伊達と  
稱て同國に神祇の神人の中より職名と在處奉幣使りし者なり國守在處の爾奉幣と  
動也といふ稱と傳へり今世より改て神明帳と稱傳へり今世より神明帳にも書  
たり其國に書ありし者なり今世より改て神明帳と稱傳へり今世より神  
院にも神明帳と書り古く名神と明神と云ふ者も御もたりわくてその神

名帳國下に記すものよりして全く同たわらざるはとより昔

式の定まりし故うへ又同國の帳も異本とるゆゑあるは

當時合へて時々書加或書改らざりし本もありぬべきなり

かの先ひきに繪字の語あり但し其神名帳もとてそのかの三層の比の

のとの神りゆへに後々の世の時々書改らば帳の違をなすべし古

き記録しものと読考るに後々の御世も及びて國守任國ま

よ怠り目代なりし者政と奉納し奉聞せしうづびみたり

たらく治草もて行々赴かううなとて國守の神持るも怠

いでさしとてありせて中世に因幡守宗原重任が九年より又下向奉

官の考のころ下向奉神持と目代とせしむるに赴りし下向

本書と引りて淫かる祠も帳のせ官社もオホのつ

除りもめりも有て漫らうりし者もオホのつ

さて又國守神持の事ハかの合書物諸集の外もオホのつ

書りも多しとて官社もオホのつ

の公被奏下りて神持も除りしオホのつ

崇奉奉らんとてテオホのつ

○朝幣

幣奉り神名帳に入奉りしオホのつ

奉りし神社、毎月朔、幣を奉り恒例ありしと云

釋日本紀引く、淡路國御式、正月九日、国内諸神奉

朔幣事毎月朔云々、兵位上生石神社とありしと云、諸國の例も然有

るに奉准知べし下字奉神帳門、さて生石神社を式と盛らし、國

内諸神と云く、中して公も、国内神名帳に入奉る神あり、

まは、いとは証まは、但、野宮開社、丹波國と郡部とありし、ハの開社

元分りしを、入りし、ハの開社と云く、ハの開社と云く、ハの開社と云く、

傳りし、ハの開社と云く、ハの開社と云く、ハの開社と云く、

神社、今何れ哉、川東御野村あり、但、官社、朔幣奉らる例ハ、

浦島之明神と云、古野社と云、但、官社、朔幣奉らる例ハ、

惟、書に之ありしと云、然るに神ありしと云、奉らる、但、官社と除

き奉らる、但、官社と除

と云く推し知べきなり、ハの開社と云く、ハの開社と云く、

年奉り下、祭第一、可早進上神坐、

年月日、廳宜、恒馬、國在、廳宮、

再、教在之、嚴、

今も下野國二荒山神社奉り

大分、常々、

官大明神、後、

其唱、とて、

鯉七喉、尉、

奉り、三月、

中、康正元年、

神社、毎月朔、幣を奉り恒例ありしと云、  
釋日本紀引く、淡路國御式、正月九日、国内諸神奉  
朔幣事毎月朔云々、兵位上生石神社とありしと云、諸國の例も然有  
るに奉准知べし下字奉神帳門、さて生石神社を式と盛らし、國  
内諸神と云く、中して公も、国内神名帳に入奉る神あり、  
まは、いとは証まは、但、野宮開社、丹波國と郡部とありし、ハの開社  
元分りしを、入りし、ハの開社と云く、ハの開社と云く、ハの開社と云く、  
傳りし、ハの開社と云く、ハの開社と云く、ハの開社と云く、  
神社、今何れ哉、川東御野村あり、但、官社、朔幣奉らる例ハ、  
浦島之明神と云、古野社と云、但、官社、朔幣奉らる例ハ、  
惟、書に之ありしと云、然るに神ありしと云、奉らる、但、官社と除  
き奉らる、但、官社と除  
と云く推し知べきなり、ハの開社と云く、ハの開社と云く、  
年奉り下、祭第一、可早進上神坐、  
年月日、廳宜、恒馬、國在、廳宮、  
再、教在之、嚴、  
今も下野國二荒山神社奉り  
大分、常々、  
官大明神、後、  
其唱、とて、  
鯉七喉、尉、  
奉り、三月、  
中、康正元年、

とていころ有べし但一其供物忌も定りていふべし  
同く国内ても極は随ひて異るもありてなるべし今世もた  
神社も有りて酒  
無るべしと云ふかゝおのつて  
判幣の御の遣まらるべし

○マコト紀伊國爲可國守四十四郡官の年中行ま二月冬朔中十列和九上上  
日吉社名安即谷行山口左左社神社茶と祭神中殿山生伊久保社曹地石赤船生皇云生行堂生行社左社  
よ左内社長十八月朔日五と飲宴して御供ヲ持て且堂爲三供取現ニテ判幣諸ノ号ニテナリナ  
上内神も判幣後四位上生澤臣貞神也ニテ判幣遣テイトク能ト

○一官の策也ニ官記

一書ありて諸國の一官と稱ふと社つ  
載りて皆延喜式内の神とあり但し中山城國は鴨大明神

はま賀茂大明神はま二社と載せし備中國官備津官と

載し備前備中備後三國官と注しし中右の書しに一官と記

せし社号と見しは皆於一官記を合し今も然稱し未も社諸國

多り然も其一官と定りし何の御也いふも同く定り

し言ふもいふも唯神國をいふ徒の護作定り

のいふは但一社号なり載りて存存本は神の書

さる社号の下は祭神を注す中いふるも打交りし

關ふもこれ神道者流るの所ありて

○マコト紀伊國爲可國守四十四郡官の年中行ま二月冬朔中十列  
日吉社名安即谷行山口左左社神社茶と祭神中殿山生伊久保社曹地石赤船生皇云生行堂生行社左社  
よ左内社長十八月朔日五と飲宴して御供ヲ持て且堂爲三供取現ニテ判幣諸ノ号ニテナリナ  
上内神も判幣後四位上生澤臣貞神也ニテ判幣遣テイトク能ト

鴨島明田集物書四月既賀茂はら  
事とて了れし社和の始り年よ







のハ又神位の卑きも有り中にも天照大神の官敷坐せし伊  
勢国よりの河曲郡都波岐神社の神社をおんまゐるごとく一宮  
とて載（宣）く（承）る（自）觀七年  
（從）法下を授ける（と）し（し）る（も）く一宮の祐と神社を定  
らる（も）事の正き古書にもに（は）る（は）何の御世何る（も）由（と）く  
定らる（も）詳らる（も）今つく考らる（も）延喜の神名式定も  
後の御世に諸國の神社神祇官或は國守とり（り）移送  
布告正べき事らる（も）の状はよりて豫て各國の社を定免置  
て先其社司の告智その社司奉り尊當く國內の諸社司を  
傳達せて又諸社司より申を奉りも執達せる（も）為（こ）の  
らみの神社の在らる（も）つつけて便宜く（し）て（し）或は時の執らる（も）

一々定らる（も）新式らる（も）らるべし然る時其其職の專くて（り）觸穢  
の障らる（も）ち（は）彼以使らる（も）べき（ら）る（も）（諸國の中）一宮と重き神社と中  
古當りる（も）備へる（も）山城と賀茂の二社共一宮と備中の古備建官  
（は）備前備後けて三國の二宮と故あり一と事らる（も）思はれ（り）て  
又二宮と三宮とを（は）其一宮を障りわ（り）時次く（り）權（は）其事預  
る（も）國內きる（も）私に定らる（も）國のあり（も）る（も）（一宮三宮と）  
（各國に）在（る）一（宮）の  
關（は）二宮と一宮との神社の尊卑の依（も）る（も）由（も）あり（も）下向せ  
引（も）因幡守宗成の一度未參二宮是有造也とて（り）下向せ  
ま（り）其（も）一宮と重き神社の如（も）て（り）事の書（も）に（は）聞（き）せ（り）  
こ（り）く（も）專當く（も）公事の便（も）を（は）故（も）の（も）勢ありて

然らばつらひ未もとのつらひ  
肥後国阿蘇郡の在聖書、御當国郡浦也  
人競置事不可思候故阿蘇社後國宮元  
朝御代社領等志高聲進候き、貞和七年六月十三日更良小次郎朝了ありて、此社を譽せ南  
朝の宣入のり、惠良地頭つら、阿蘇宮を式内健甕龍神社とて、事記に載り、先朝御代より  
後醍醐天皇の御代と稱せり、つらひのり、公事御子と宮を稱、かゝて一宮の下より、  
重たつたつた、此後の御世より、社をいふるべし、  
云了也、新式に定らるるれと、後、然のり、行も、さき事も  
い、さき事、漸々つらひ由、遂に、其林のみ境を  
何の由も、重た社、の如く、未、のり、  
二三の宮も、准て思ひ、

○鎮守惣社の事 諸国、鎮守、惣社、折、神社の多き、  
つらひ、由、つらひ、神と、考、に、  
号、其、後の古書、

号、其、後の古書、  
く書、  
官符三直皆給出羽国、通、鎮守三位勲三平守大物忌

明神山燃、有御占事、  
兼、能、海、即、大物  
忌、神、社、名、神、大、  
引、小槻廣房の勲、永保三年六月十五日、出雲国司宣、

云、鎮守水澤明神、  
武、に、多、部、三、沢、神、社、  
書、維元永年、九月十六日、  
鳥、羽、天、皇、御、世、  
當国鎮守三位出雲兩所

大明神宇豆廣前、  
鳥、羽、天、皇、御、世、  
因、司、四、位、下、行、周、防、守、藤、原、朝、臣、家、保、

恐、天、忌、命、會、申、事、由、  
被、  
去、年、十、月、廿、九、日、但、馬、国、  
鳥、羽、天、皇、御、世、  
當国に遷任、今  
月、十、日、入、境、着、府、即、官、鑑、手、受、領、任、  
天、  
種々、御、神、宝、物、手、調、



作<sup>天</sup>今日御神持乎行布其修室物<sup>三張</sup>云々<sup>其化</sup>

<sup>寛神社在座下</sup>朝野群載<sup>括川天</sup>寛治七年<sup>皇祐御世</sup>六月主稅勘解由使の勘相

模国解文状の定奉の条<sup>三</sup>鎮守宮公廨<sup>三</sup>方四千卅七束九把五分

寸<sup>一</sup>同状例減省の条<sup>一</sup>鎮守宮公廨<sup>二</sup>方束も<sup>一</sup>え<sup>一</sup>く<sup>一</sup>三<sup>一</sup>定

奉と減省せし敷<sup>一</sup>この鎮守宮といへば其国内の神社中<sup>一</sup>之<sup>一</sup>枝

限と<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>く<sup>一</sup>然<sup>一</sup>區<sup>一</sup>預<sup>一</sup>と<sup>一</sup>神社敷<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>を<sup>一</sup>関<sup>一</sup>と<sup>一</sup>改

按<sup>一</sup>ず<sup>一</sup>り<sup>一</sup>て<sup>一</sup>国守の殊更<sup>一</sup>て<sup>一</sup>国の為<sup>一</sup>に<sup>一</sup>祈禱<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>何社と<sup>一</sup>然<sup>一</sup>申<sup>一</sup>由<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>と<sup>一</sup>有<sup>一</sup>り<sup>一</sup><sup>上野国の神と傳へ上野国松本也七座と記し其首鎮守寺行幸</sup>

車<sup>一</sup>國內の鎮守と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup><sup>茨城の式土座座<sup>一</sup>武<sup>一</sup>都<sup>一</sup>を<sup>一</sup>名<sup>一</sup>以<sup>一</sup>の<sup>一</sup>諸<sup>一</sup>社<sup>一</sup>と<sup>一</sup>載<sup>一</sup>し<sup>一</sup>照<sup>一</sup>り<sup>一</sup>武<sup>一</sup>都<sup>一</sup>と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup></sup>

兼<sup>一</sup>く<sup>一</sup>く<sup>一</sup>の<sup>一</sup>も<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup><sup>ちう<sup>一</sup>く<sup>一</sup>に<sup>一</sup>一條<sup>一</sup>兼<sup>一</sup>良<sup>一</sup>公<sup>一</sup>の<sup>一</sup>東<sup>一</sup>齋<sup>一</sup>隨<sup>一</sup>筆<sup>一</sup>と<sup>一</sup>奈<sup>一</sup>談<sup>一</sup>仇<sup>一</sup>理<sup>一</sup>那</sup>

大宰<sup>一</sup>秩<sup>一</sup>滿<sup>一</sup>婦<sup>一</sup>路<sup>一</sup>歷<sup>一</sup>伊<sup>一</sup>豫<sup>一</sup>三<sup>一</sup>島<sup>一</sup>風<sup>一</sup>浪<sup>一</sup>惡<sup>一</sup>不<sup>一</sup>能<sup>一</sup>登<sup>一</sup>船<sup>一</sup>夢<sup>一</sup>三<sup>一</sup>島<sup>一</sup>朋<sup>一</sup>神<sup>一</sup>告<sup>一</sup>回<sup>一</sup>定<sup>一</sup>書<sup>一</sup>

額<sup>一</sup>寛<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>書<sup>一</sup>應<sup>一</sup>時<sup>一</sup>海上<sup>一</sup>穂<sup>一</sup>榜<sup>一</sup>曰<sup>一</sup>日本<sup>一</sup>總<sup>一</sup>鎮<sup>一</sup>寺<sup>一</sup>大山<sup>一</sup>積<sup>一</sup>明<sup>一</sup>神<sup>一</sup>と<sup>一</sup>云<sup>一</sup>え<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ハ

疑<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>の<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>訓<sup>一</sup>抄<sup>一</sup><sup>連長四</sup>の<sup>一</sup>撰<sup>一</sup>む<sup>一</sup>り<sup>一</sup>仇<sup>一</sup>理<sup>一</sup>那<sup>一</sup>大<sup>一</sup>貳<sup>一</sup>の<sup>一</sup>任<sup>一</sup>は<sup>一</sup>け<sup>一</sup>り<sup>一</sup>書<sup>一</sup>と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

る<sup>一</sup>道<sup>一</sup><sup>三島年申す</sup>伊<sup>一</sup>豫<sup>一</sup>三<sup>一</sup>島<sup>一</sup>明<sup>一</sup>神<sup>一</sup>の<sup>一</sup>託<sup>一</sup>宣<sup>一</sup>あり<sup>一</sup>て<sup>一</sup>彼<sup>一</sup>社<sup>一</sup>の<sup>一</sup>額<sup>一</sup>と<sup>一</sup>書<sup>一</sup>

と<sup>一</sup>り<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>も<sup>一</sup>然<sup>一</sup>を<sup>一</sup>と<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ん<sup>一</sup>と<sup>一</sup>て<sup>一</sup>時<sup>一</sup>の<sup>一</sup>筆<sup>一</sup>を<sup>一</sup>合<sup>一</sup>して<sup>一</sup>関<sup>一</sup>也<sup>一</sup>と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

理<sup>一</sup>那<sup>一</sup>の<sup>一</sup>比<sup>一</sup>神<sup>一</sup>社<sup>一</sup>日本<sup>一</sup>總<sup>一</sup>鎮<sup>一</sup>寺<sup>一</sup>と<sup>一</sup>り<sup>一</sup>て<sup>一</sup>号<sup>一</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>も<sup>一</sup>思<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>し<sup>一</sup>

名称<sup>一</sup>と<sup>一</sup>考<sup>一</sup>す<sup>一</sup>に<sup>一</sup>彼<sup>一</sup>三<sup>一</sup>島<sup>一</sup>の<sup>一</sup>神<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>伊<sup>一</sup>豫<sup>一</sup>三<sup>一</sup>島<sup>一</sup>風<sup>一</sup>記<sup>一</sup>に<sup>一</sup>宇<sup>一</sup>智<sup>一</sup>郡<sup>一</sup>御<sup>一</sup>島<sup>一</sup>也<sup>一</sup>神<sup>一</sup>御

名<sup>一</sup>大山<sup>一</sup>積<sup>一</sup>神<sup>一</sup>一名<sup>一</sup>知<sup>一</sup>多<sup>一</sup>志<sup>一</sup>天<sup>一</sup>神<sup>一</sup>也<sup>一</sup>是<sup>一</sup>神<sup>一</sup>者<sup>一</sup>高<sup>一</sup>麗<sup>一</sup>難<sup>一</sup>波<sup>一</sup>高<sup>一</sup>津<sup>一</sup>宮<sup>一</sup>御<sup>一</sup>宇<sup>一</sup>天

皇<sup>一</sup>所<sup>一</sup>也<sup>一</sup>故<sup>一</sup>神<sup>一</sup>自<sup>一</sup>百<sup>一</sup>濟<sup>一</sup>國<sup>一</sup>度<sup>一</sup>乘<sup>一</sup>坐<sup>一</sup>而<sup>一</sup>津<sup>一</sup>國<sup>一</sup>御<sup>一</sup>島<sup>一</sup>坐<sup>一</sup>り<sup>一</sup>て<sup>一</sup>韓<sup>一</sup>神<sup>一</sup>也<sup>一</sup>

日本<sup>一</sup>總<sup>一</sup>鎮<sup>一</sup>寺<sup>一</sup>と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>も<sup>一</sup>稱<sup>一</sup>を<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ば<sup>一</sup>思<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>に<sup>一</sup>彼<sup>一</sup>那<sup>一</sup>と<sup>一</sup>り<sup>一</sup>け<sup>一</sup>り<sup>一</sup>に<sup>一</sup>後

の<sup>一</sup>也<sup>一</sup>彼<sup>一</sup>社<sup>一</sup>同<sup>一</sup>と<sup>一</sup>の中<sup>一</sup>に<sup>一</sup>か<sup>一</sup>の<sup>一</sup>仇<sup>一</sup>理<sup>一</sup>那<sup>一</sup>の<sup>一</sup>古<sup>一</sup>事<sup>一</sup>と<sup>一</sup>わ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>も<sup>一</sup>備<sup>一</sup>徒<sup>一</sup>と<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>へ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>

る爲を説の如く然る額を作置て已分神社を八ノ尊とせんといふ事  
とのこそ有らざる然いへど寛長公の隨筆にも記し及ぶと悪  
むけの近き世の事いへばかの公文明十三年今一ノ巻云々その院  
に爲を説きし事ありては佛を説きし事ありては下云々  
惣社中も諸寺も其の如く論じ説と妄念をいふと又彼物の書と云ふ事  
も其社に在りて推しし事ありては云々傳へし事ありては云々  
道も額字ありては傳へて珠をいふ事ありては云々  
みとも其書のありしむも其書ありては云々  
五筆の監定をいへりて云々

○もの惣社とてその書の古く書し見及びしる百練抄よ公安九年二  
月十七日矣上及敷十町其中法成寺惣社法具院焼失といへ  
り法成寺は治安二年藤原道長公の建立ちりすまは久安二年九月  
十五日法成寺惣社  
焼也といへり又治安二年の推記に正月十日四十五所焼と云ふ事ありては惣社も  
應安二年の推記に惣社四里許の下には所寺自社ありと云ふ事あり

中も圖書よ公安六年八月廿四日攝政吉直於法性寺新造堂被行惣社  
祭新尊崇寺に奉納せられたる如きと載供奉騎馬鞋一取而騎至寺夜堂庶幾  
云々上皇臨幸有御見物ありり上皇六鳥羽天皇の御年なり法性寺  
八負信公の建立ちり惣社の事と帝王編年記に寛元九年三月十五日  
東福寺惣社遷宮也奉号成就宮といへば惣社造替果て近座の  
よ成成就宮と号らしむと由り百練抄も同年の八月十二日己亥今日  
法性寺成就宮東福寺  
鎮寺被始行祭礼禪定殿下石大臣殿允大将殿准后  
尚侍両御方内御参各被啓幣帛云々と云ふ事ありて  
重祭祭りし事ありては今も東福寺に鎮寺社  
ありては成龍寺に櫛東福寺八月輪魚實公の寺に  
又さる百練抄よ安元元年六月十六日蓮華寺院惣社鎮座階以下世



○名を拜吉重鏡等又  
四年前在平相国  
社を拜馬等と社  
日官船相といふ  
○官船等事古事  
○御司其作  
○和如及回書  
諸國一官船社

称す内國の神と勸請て惣て其中央に祀り四方に他國の  
件の神をも祀りて其と合せて鎮守と稱して祀つたものとあり  
然るとはたかの大物忌羽神の如く旧より祭事もある式社と鎮守  
との殊々異なる件の昔書鏡陸奥國の惣社の事之の聞えり文信  
五年より前の二年九月廿八日の条に神社佛寺興行事二品日來  
思呂吉由所被申京都也且於東海道者仰守護入寺被祀  
其國惣社并國分寺破壞及尼寺顛倒等事是重被經奏聞  
隨事依為被加修造也

○光永元代記  
一國分寺並國分  
各國司並權方  
○和上國分記

國は惣社といふありてその國々の鎮守とて崇めたり

其國の惣社並國分寺國分尼寺といふも諸國に惣社ありたりと思ひ候  
國分寺國分尼寺を聖天宮といはせり候ともその昔書鏡の件之後  
國分寺國分尼寺とて

建文四年九月相國の神社佛寺谷川上清ヶ和訓來し諸國に惣社や或曰  
神馬と奉らるる中惣社柳田と云々

國内必建總社有事于國內官社則國司率禊屬先修典札於其後  
如京師神祇宮河内の總社國府村あり伊勢の總社鈴鹿郡國府

村あり播磨の總社惟路の城内ありて然るとも聞く  
○とて其証といふに云々状説のみは候ひ

稀野の聞きよきこと又國府の御所ありてハハんと云ふ件の説の如く  
ありて國内の二社二社を明とす

然らば諸國に國司とて治免りし制とあり後世の中漸事漸々  
なりとてやうけ御政も緩て國司の怠もいそむわらひ其を國

内神社の順拜し時々の奉幣ふりも堪へずし時々の國有  
のさしり各総社と稱して建置國內の諸神を勸請て持治り

奉幣などの神事を行へる国のいであつて、なほその便よきは  
働いて漸く諸國にもおよび、遂に諸國すべての例の如うとなつて、  
陸奥國<sup>世の書しと雖も</sup>にもあつて、但一府の  
リのみならず、他社あが聞ゆらば、其よりよく勢ありなるべしのお  
がのみとせ、神ごと合祭ありりて、この上奉々蓮華  
王院常光院の総社、常も神々のより准ておはす  
そ後の書に、天福元年の難<sup>難</sup>記も七月七日川崎邊社祭結構ま  
るふ、<sup>件の証文</sup>惣社の林をもち、証をたべりするを  
もとより惣社、稱へ祭神は鎮守といふ、号はあ  
うづづく<sup>蓮華社、鎮守、八幡、延光天皇、平麻呂、記附、大御所、藤原、平、藤原</sup>  
<sup>及、御、宗、子、社、也、大、師、仰、行、杖、記、云、り、宣、鹿、御、記、由、山、慈、照、寺、鎮</sup>  
<sup>守、鎮、半、圓、八、幡、の、鎮、と、申、す、候、へ、室、所、殿、仰、坐、故、安、久、御、志、宣、八、幡、守、記、と、も、一、二、鎮、也、</sup>  
八幡守と書たり、<sup>關、白、影、字、が、も、の、う、慈、照、寺、八、幡、大、神、と、鎮、守、と、記、り、り、り、り</sup>

中、<sup>註</sup>神記、西郡社、嘉祿、辛、丑、二月、十四、日、水、智、成、以、後、所、住、母、宮、吉、田、區  
北野、黄、布、祢、三、甲、マ、リ、以、上、百、有、餘、所、の、鎮、守、也、<sup>註</sup>初、置、真、別、臣、の、祭、始、り、<sup>註</sup>後、<sup>註</sup>別、臣、  
に、列、は、れ、<sup>註</sup>朝、暮、奉、祀、<sup>註</sup>仙、洞、法、位、寺、殿、師、鎮、守、号、蓮、華、王、院、惣、社、と、稱、<sup>註</sup>を、<sup>註</sup>八、幡、社、と、法、住、寺、鎮、  
守、と、申、せ、ら、う、由、り、<sup>註</sup>親、房、御、の、神、事、記、に、<sup>註</sup>功、の、鎮、守、と、申、せ、<sup>註</sup>社、と、定、置、り、記、<sup>註</sup>は、  
可、成、分、の、地、の、語、を、言、ふ、社、  
号、と、申、せ、ら、へ、別、の、う、<sup>註</sup>せ、ら、し、り、<sup>註</sup>と、申、<sup>註</sup>論、は、は、<sup>註</sup>惣、社、と、鎮、守、と、八、幡、と、申、<sup>註</sup>鎮、  
守、と、惣、社、と、八、幡、と、申、<sup>註</sup>せ、ら、し、り、<sup>註</sup>と、申、<sup>註</sup>る、<sup>註</sup>由、り、<sup>註</sup>私、も、祭、奉、む、  
る、神、と、<sup>註</sup>て、<sup>註</sup>朝、廷、より、<sup>註</sup>祭、ら、し、<sup>註</sup>神、は、<sup>註</sup>あ、り、<sup>註</sup>と、<sup>註</sup>宣、鹿、御、記、<sup>註</sup>載、と、<sup>註</sup>す、  
論、旨、案、<sup>註</sup>近、江、国、神、崎、郡、小、幡、社、可、奉、号、惣、社、大明、神、之、由、被、聞、食、  
記、者、依、天、氣、執、達、如、件、永、正、十、七、年、十、月、十二、日、小、幡、山、神、官、中、允、中、辨、判、  
と、<sup>註</sup>名、<sup>註</sup>と、<sup>註</sup>心、得、<sup>註</sup>と、<sup>註</sup>小、幡、社、神、名、式、<sup>註</sup>も、之、と、<sup>註</sup>惣、社、<sup>註</sup>を、<sup>註</sup><sup>註</sup>近、  
の、在、り、<sup>註</sup>宣、鹿、御、記、<sup>註</sup>の、小、幡、社、神、崎、郡、<sup>註</sup>  
を、<sup>註</sup>兵、國、司、の、參、り、<sup>註</sup>惣、社、<sup>註</sup>と、<sup>註</sup>地、名、<sup>註</sup>と、<sup>註</sup>依、り、<sup>註</sup>小、幡、社、と、呼、ぶ、事、と、<sup>註</sup>ら、  
未、し、と、<sup>註</sup>奉、乃、惣、社、号、と、<sup>註</sup>後、<sup>註</sup>を、<sup>註</sup>事、と、<sup>註</sup>請、奏、と、<sup>註</sup>許、し、<sup>註</sup>り、<sup>註</sup>ら、<sup>註</sup>べ、

よつて社号と改く惣社と稱へき由請奉じたまふ事と  
さて此のうみ神祇官の政も有光の御世なりと云々  
奏せしうりかくてこそと思はれ惣社鎮守と稱へたの  
地名るといふて世の常の社号ならた社ありや  
東福寺の鎮守の惣社と成就官といふも准て思ひ合ふ  
しよ又いふく惣社鎮守など稱へ祭り始りしこと上  
辨へしや惣社鎮守と稱へ祭末を神社といふ  
よづむの例のやま教へし祭りべし  
るむむの国内の神くと勧請と祭と社ふむ今世  
本の屋々神くと小其惣社の祭とに享ふよ

さよとらるるも其心ともひて祭奉る事よと俱後  
世よ及びて漸く惣社鎮守とみよとに呼ぶ事と云り  
やうあり古く後ともありむきとよくちて勤むべき

神名帳標目私考附録

集説

或人神名帳標目私考と見てぢなみよきうう此事も  
何をあけつゝいふいふとおるく書つけてよ讀  
ナシは感おのこはうりもて思ひまをまむとそふに  
はうりもあぬとりの書にもにえあうりも事や前  
物三入りの説もを年ごう書にもあつての中よ  
うおるとまづことばうりもたよさる日書集をてそせ  
うう条

世に神社の衰微或廢イナシ又神事カミコトの輕易イソコトなりうりも天乃下

の乱<sup>ウツ</sup>なりて朝家<sup>テウカ</sup>之政の衰<sup>シ</sup>へさせり故<sup>ユヘ</sup>ト<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>誰<sup>ナニ</sup>も  
思<sup>オモ</sup>ひて<sup>テ</sup>其<sup>ソノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>び<sup>テ</sup>て<sup>テ</sup>然<sup>シテ</sup>の<sup>ノ</sup>論<sup>ロ</sup>ぶ<sup>ク</sup>も思<sup>オモ</sup>ふ<sup>シ</sup>べ<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>古  
事<sup>コト</sup>記<sup>キ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>紀<sup>キ</sup>を<sup>テ</sup>下<sup>カ</sup>免<sup>メ</sup>古<sup>コ</sup>書<sup>ショ</sup>の<sup>ノ</sup>古<sup>コ</sup>傳<sup>デン</sup>説<sup>セツ</sup>よりてつく考<sup>コウ</sup>る<sup>ト</sup>、  
朝<sup>テウ</sup>政<sup>テイ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>元<sup>ゲン</sup>と<sup>ス</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>べき<sup>ニ</sup>神<sup>カミ</sup>事<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>輕<sup>ケイ</sup>易<sup>イ</sup>なる<sup>ヲ</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>シャ</sup>の<sup>ノ</sup>衰<sup>シ</sup>微<sup>ヒ</sup>を<sup>テ</sup>  
よ<sup>ク</sup>よりて<sup>テ</sup>おのづ<sup>カ</sup>ら<sup>ニ</sup>神<sup>カミ</sup>之<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>護<sup>ゴ</sup>深<sup>コ</sup>む<sup>ク</sup>世<sup>セ</sup>間<sup>カン</sup>の<sup>ノ</sup>乱<sup>ウツ</sup>出<sup>デ</sup>来<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>朝<sup>テウ</sup>家<sup>テイ</sup>  
の<sup>ノ</sup>衰<sup>シ</sup>へ<sup>テ</sup>ひ<sup>キ</sup>り<sup>テ</sup>な<sup>レ</sup>ば<sup>ズ</sup>も<sup>ト</sup>云<sup>イ</sup>ふ<sup>ニ</sup>神<sup>カミ</sup>事<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>輕<sup>ケイ</sup>易<sup>イ</sup>なる<sup>ヲ</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>シャ</sup>の<sup>ノ</sup>衰<sup>シ</sup>微<sup>ヒ</sup>  
つ<sup>レ</sup>との<sup>ノ</sup>本<sup>ホ</sup>い<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>畏<sup>オソ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>朝<sup>テウ</sup>家<sup>テイ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>本<sup>ホン</sup>異<sup>イ</sup>な<sup>リ</sup>  
他<sup>タ</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ミチ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>ち<sup>も</sup>も<sup>ト</sup>信<sup>シ</sup>受<sup>ウ</sup>行<sup>コウ</sup>ひ<sup>タ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>改<sup>カ</sup>る<sup>ト</sup>べ<sup>ク</sup>  
思<sup>オモ</sup>ふ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>亦<sup>ナ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>他<sup>タ</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ミチ</sup>を<sup>テ</sup>漸<sup>シ</sup>  
信<sup>シ</sup>受<sup>ウ</sup>行<sup>コウ</sup>ひ<sup>タ</sup>る<sup>ト</sup>ひ<sup>キ</sup>り<sup>テ</sup>速<sup>スイ</sup>き<sup>ニ</sup>御<sup>ミ</sup>代<sup>ダイ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>世<sup>セ</sup>の<sup>ノ</sup>古<sup>コ</sup>書<sup>ショ</sup>に<sup>モ</sup>

て<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>亦<sup>ナ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>神<sup>カミ</sup>事<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>輕<sup>ケイ</sup>易<sup>イ</sup>なる<sup>ヲ</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>シャ</sup>の<sup>ノ</sup>衰<sup>シ</sup>微<sup>ヒ</sup>  
稱<sup>ケル</sup>べき<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>延<sup>エン</sup>喜<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>十<sup>ジュウ</sup>四<sup>シ</sup>年<sup>ネン</sup><sup>四月二日</sup>三<sup>サン</sup>善<sup>ゼン</sup>清<sup>セイ</sup>行<sup>コウ</sup>朝<sup>テウ</sup>臣<sup>シ</sup>より<sup>テ</sup>異<sup>イ</sup>見<sup>ケン</sup>  
十二<sup>ジュウニ</sup>条<sup>ジョウ</sup>中<sup>チュウ</sup>應<sup>オウ</sup>消<sup>シュウ</sup>水<sup>スイ</sup>旱<sup>カン</sup>來<sup>キ</sup>豐<sup>ホウ</sup>穰<sup>ジョウ</sup>事<sup>ジ</sup>臣<sup>シ</sup>伏<sup>フツ</sup>以<sup>テ</sup>國<sup>クニ</sup>以<sup>テ</sup>民<sup>タミ</sup>爲<sup>ス</sup>天<sup>テン</sup>  
民<sup>タミ</sup>以<sup>テ</sup>食<sup>シ</sup>爲<sup>ス</sup>天<sup>テン</sup>死<sup>シ</sup>民<sup>タミ</sup>何<sup>ナニ</sup>據<sup>コ</sup>死<sup>シ</sup>食<sup>シ</sup>何<sup>ナニ</sup>資<sup>ス</sup>然<sup>シテ</sup>則<sup>スレバ</sup>安<sup>ヤス</sup>民<sup>タミ</sup>之<sup>ノ</sup>道<sup>ミチ</sup>延<sup>エン</sup>食<sup>シ</sup>  
之<sup>ノ</sup>要<sup>ヨウ</sup>唯<sup>タリ</sup>在水<sup>スイ</sup>早<sup>ソウ</sup>死<sup>シ</sup>殄<sup>テイ</sup>年<sup>ネン</sup>殺<sup>ス</sup>有<sup>リ</sup>登<sup>トウ</sup>也<sup>ナリ</sup>故<sup>ユヘ</sup>朝<sup>テウ</sup>家<sup>テイ</sup>每<sup>マダ</sup>年<sup>ネン</sup>二<sup>ニ</sup>月<sup>ゲツ</sup>四<sup>シ</sup>  
日<sup>ニチ</sup>六<sup>ロク</sup>月<sup>ゲツ</sup>十<sup>ジュウ</sup>日<sup>ニチ</sup>於<sup>テ</sup>神<sup>カミ</sup>祇<sup>キ</sup>官<sup>カン</sup>立<sup>ツ</sup>祈<sup>イノ</sup>年<sup>ネン</sup>月<sup>ゲツ</sup>次<sup>ジ</sup>之<sup>ノ</sup>祭<sup>サマヒ</sup>嚴<sup>エン</sup>加<sup>カ</sup>齋<sup>サイ</sup>肅<sup>ソク</sup>盥<sup>アン</sup>  
禱<sup>ト</sup>神<sup>カミ</sup>祇<sup>キ</sup>乞<sup>ク</sup>其<sup>ソノ</sup>豐<sup>ホウ</sup>熟<sup>ジュク</sup>致<sup>ス</sup>其<sup>ソノ</sup>報<sup>ホウ</sup>賽<sup>サイ</sup>其<sup>ソノ</sup>儀<sup>ギ</sup>公<sup>コウ</sup>卿<sup>ケイ</sup>率<sup>ソツ</sup>辨<sup>ベン</sup>官<sup>カン</sup>及<sup>ツ</sup>百<sup>ヒャク</sup>官<sup>カン</sup>  
參<sup>サン</sup>神<sup>カミ</sup>祇<sup>キ</sup>官<sup>カン</sup>神<sup>カミ</sup>祇<sup>キ</sup>官<sup>カン</sup>每<sup>マダ</sup>社<sup>シャ</sup>設<sup>セツ</sup>幣<sup>ヘイ</sup>帛<sup>ボク</sup>一<sup>イツ</sup>罍<sup>ライ</sup>清<sup>セイ</sup>酒<sup>シュ</sup>一<sup>イツ</sup>匱<sup>ケイ</sup>鐵<sup>テツ</sup>鉞<sup>ゼン</sup>一<sup>イツ</sup>  
枝<sup>シ</sup>陳<sup>チン</sup>列<sup>リョク</sup>棚<sup>テウ</sup>上<sup>ジョウ</sup>又<sup>マタ</sup>社<sup>シャ</sup>或<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>牽<sup>ケン</sup>馬<sup>バ</sup>者<sup>シャ</sup>焉<sup>ナリ</sup>亦<sup>マダ</sup>皆<sup>ナリ</sup>九<sup>ク</sup>右<sup>ウ</sup>馬<sup>バ</sup>寮<sup>リョウ</sup>牽<sup>ケン</sup>列<sup>リョク</sup>  
神<sup>カミ</sup>馬<sup>バ</sup>爰<sup>ナリ</sup>神<sup>カミ</sup>祇<sup>キ</sup>官<sup>カン</sup>詭<sup>クイ</sup>祭<sup>サイ</sup>文<sup>ブン</sup>畢<sup>ヒツ</sup>以<sup>テ</sup>牲<sup>シヤウ</sup>祭<sup>サイ</sup>物<sup>モノ</sup>頒<sup>ハン</sup>諸<sup>シヨ</sup>社<sup>シャ</sup>祝<sup>シユ</sup>部<sup>ブ</sup>奉<sup>ホウ</sup>本<sup>ホン</sup>





ちや／＼たのむにあつせ

神皇正統記 天乎宝字三年六月丙辰皇有官及師法僧  
奉奉去月九日初登上野寺以神神女を其德同

意見 聖德太子風地社我信事多不穩雖下官并不行於地故不見載之記事云々事也  
之しと云々云々いとはやくいふも細部の異見も用ひてせんがらむかの周歴る  
おしつたりし事多し  
其後もし御世さるる 神社の御會釋又祭夏まじもむのつゝ其  
ころぞものお化して ちやりのともなく事にくせをみいり  
よよりて ちやと上古の故實の意へへ漸しゆくをちうりて ちや上  
表の礼にけらる方のかぶく煩げくらうして奉まぐる人も  
地がくくくくぬむに世の人心天々外国心も變化ひても佛と信  
む人も世々多くらうして神と尊む心の薄くらうむ小合せて  
をなく爾危の出来たるべし又穢も忘し事也 陰膳祭場の赤い  
櫓も田に其外  
さちくの穢の式あくと信ふ世に  
いはしつゝ小ぢよるちやせとあり 上古の主意へへ塵へし 是あさて

唯ちや／＼日敷と定先ていひつゝくとのせよつゝこぼる

抱うごきか／＼なるくく神奉り障らうらうちやがうらう奉る

出来たりもくくくくくくくくくく 神皇正統記 時諸帝然祀燭則對神  
神則難しと云々事そり茶沈むは不飲禮 則不敬礼不飲禮 賬禮礼日皇神子  
交鬼神之道也南極高亮高宗或未能脱行儀俗事神祀必有過焉 祀已戒其祀反禮既

傳説蓋因天失而正之也 神皇正統記 ちやあはると奉せとのちやも味い

まべきよ／＼あば上の論し心ほえとよく古の例とくちあて仕

奉り神八汰に穢と深く思みゆ 神皇正統記 故實の主意之旨

斎清まつり謹てまつりまき事まことあり

○年中行事秘抄云天子每日御拜事 順仁和四年十月十九日

御記云 我国者神国也 因每朝敬礼持四方大中小天神地祇

女後御事  
及合  
又合

○敬拜之事始自今後一日元元  
○皇紀神代卷四十四  
○皇紀神代卷四十四  
○皇紀神代卷四十四

敬拜之事始自今後一日元元  
○皇紀神代卷四十四  
○皇紀神代卷四十四  
○皇紀神代卷四十四

○職原抄神祇伯の下に中古以来華山院御守彈正丑清  
仁親王後胤相統他人不任之彼流四五岳之時給源姓  
雖狂中將任伯之日復王氏是近例也日記云云如く  
相統て今然り彼家譜を按ず清仁親王子源延信朝臣  
後冷泉天皇の御世乃初寛徳三年二月王氏は復く伯  
任りしは始りて皇親六世より後今もなず伯は任  
りし時王氏と授りし例なり白川家と云ふこの家門と  
伯家と稱て世々天白の神事御障坐りし時御手代  
奉仕せし職なりきりし

○統紀皇龜十二年十一月甲辰勅尤右京如聞比未元知留

姓構合平現安崇禊祀葛狗之設符書之類百方作壯損益  
街路輩求福還涉厭魅非唯不畏朝憲誠亦長養妖妄自  
今以後宜嚴加禁斷云々但有患禱祀者非在京內者許之  
之そつりものを既に京内に淫祀の在るを然ら戒は禁斷す也なり  
と云々也乃をおしてしむとすむ

○五禁 載も建曆二年三月廿二日の宣旨中に可如法  
勤行諸社祭祀神事等事抑吾朝彛範為先敬神を機  
繫務を過損祭是以治邦安民恣遇に凶恒例臨時宜  
儼た礼を候而有司怠慢而不調職を諸國拒捍而如忘本祭  
非に只非忤且是狎を神禁を夏之陵夷責而有餘に早守祭式

宜令催行就中祈年已下四度祭幣物案上案下雖有勅不該  
之備に同諸社如元奉送之實任建久二年有旨假令に遵行無  
又祈年穀以下伊勢幣率分河納物國或近年季元猶致に所  
洪を或は當日刻限絶以進濟然間儀式空入夜景奉遣治及  
晚更に自今以後專存謹慎永勿懈緩す可停止京畿諸  
國建立諸社を社別宮を夏抑近に曹思拙之徒恣立仁祠於  
帝都之際に知行之輩屢祝を社於神領之中に雖似敬神之  
有餘に還涉費祭人を不信に加之に就別宮を社を之加増を致す都  
鄙田地之掠領敗法亂紀を莫を於斯に自今以後永に加禁す  
過若猶不怕嚴制に縱令に企奉鎮を魁を徒を停廢を之に雖に致す如

在之礼乖違皇憲者其奈神鑒何於違犯輩任法斷  
定可令所部官司停止諸社神人諸寺惡僧濫行事  
抑神人者亦敬為本僧徒者修學為先而頃年猛惡之  
民稱神人盈城愚癡之侶号寺僧溢邪不願神者偏  
致暴惡不憚佛意刺草狼喫濫行之至一頁而有餘自今以  
後遣可採遏若不拘嚴制者任法令紀斷之  
の神社のありする祭式の衰へてまゝなりし故に  
此時乃宜可ハいれ御制をたかくけくはく之を采久の  
甚く乱りてまゝ行はせりてハいと可くかたがた事  
るハありしがてとより三十年あり後書集錄

建長二年七月廿日丙戌都鄙神社廢陵事殊可有與行之  
由及御沙汰於勅領所事者追可被任奏聞先至關東御分  
所之者任被定置之旨可抽條理之功若又及大破者不可令言  
上隨其在左可有御沙汰之由所被仰出也  
是當世別當神王等  
只食仏物神饒無與隆之忘之旨度々評定之時凝群議如  
此とんくつりこハ武家頼嗣將軍のせ北条時頼をいふ事  
執ても時憲あづも道小つりつりといふ事以試ありしとこ  
だにえ行いふりつとすまふららともしつりつり

○風雅集に後宇多天皇の大御哥天つ神國つ社といつひてや  
りかへりしれふいとふ返本居宣長翁のいつりしとこ

のそよはしくかゝりて大活乎と云く人の国のしくつらしくこの事  
にさひせざるもふりつとらむ。世はつらふの事なり。天の下  
いやしく活まりつと神の活ふのそよはらばてよつ代りすことにあ  
こし方しつといひしなり。

○欽明紀十六年二月菟我大臣稻目宿祢百濟王子惠論し  
る言に昔在大泊瀬天皇之世汝國為高麗所逼危甚累卵於  
是天皇命神祇伯家受祭於神祇稅者託神語報曰屈請走邦之神  
往將亡之主必當國家濫請人物又由是請神往救所以社稷安  
寧原夫建邦神为天地剖判之代草木言語之時自天降米  
造立國家之神也頃聞汝國輟而不祀方今懊悔前過修理神

宮奉祭神靈國可昌盛汝當莫忘

と云ふなり。これより前九年紀三月天皇皇欲親伐新羅神刑天皇曰无社也  
天皇由是不再行勸云々等曰云々汝四郡拜为天將軍軍臣以王師恭  
代天罰擊行と云を神教と  
本りたりと云ふ事なり。こゝに雄略天皇の御世神教云々としてとの

百濟と治をらひ古史と出くを論せし其に雄略紀よか  
一年春三月天皇御百濟為高麗所破以久麻那利賜汝洲王救與其  
國時人皆云百濟國雖屬既亡蒙憂倉下家頼於天皇更造其國と  
云々つて時のものなり。さて自天降造立國家之神といふをいふ  
神祇紀の一ちに云々素盞鳴尊新羅國を天降おく古事なる  
ひきまことあり大皇國の大道く等し趣しをあてての韓國の大道  
ふとをむらり神語事實と云して論せざるを奉らむ漸り

大皇國に仕奉まはると忠をなすなり世はみな是に礼してつひに  
 主とまはるぬ都（一）國はわづらふを不論り伴の神教は韓國  
 とはト光もろこのり接統西戎の諸國はともあはさこころ  
 ふらばつゆまを主とだまぬ都とまゐりてあはさ見は  
 他國のうへのゆゑも本つ大皇國の神法の尊き趣とまよが  
 してとらひひつらつあつとつひつらつか（漢文し麗書に  
 高王、齊小侯）  
國と領まはる止のりして盛り潰へる語、天皇卷命、有海狗天下居る、高皇  
 廣湯王が夏孫王として國を養はるとして免てなすこと、その始孫、天甲とい  
 何乎か誤へる語、夏王弗克、甬、神鹿、氏皇、天弗保、照方、方、照、迥、有、余、養、宗、德、  
 伴作神主、惟尹躬登、湯成、有、德、克、享、天心、受、天明、命、以、有、九、有、之、師、安、華、夏、誥、  
 開書、周武王、女、敵、紂、王、と、赫、也、と、し、孔、聖、言、に、紂、王、不、德、と、言、平、一、天、其、以、乎、又、民、を、さ、す、  
 上帝、弗、暇、視、降、神、喪、其、故、と、し、紂、王、人、恭、行、天、罰、を、さ、す、と、し、つ、は、つ、ら、つ、ら、つ、の、多、く、又、又、  
 た、つ、か、つ、つ、の、語、中、に、皇、天、とい、ひ、わ、に、天、も、い、ひ、又、上帝、とも、い、ふ、天神、とい、つ、て、  
 つ、つ、免、つ、つ、の、か、の、回、信、神、と、辨、つ、履、り、り、も、あ、り、せ、て、天、神、と、託、て、誣、言、せ、る。

この分り、その夏敵周の王もかせとせしか皇朝小してハ神女の天皇の法せしめあり  
 ることばやくむらこ。りのり誣言の悪く人の世とやうであらうなり  
 ○出雲風土紀意宇郡安耒郷下に即此海有日賣荷

といふ事なきなり此記天平五年二月に勅造してよきとせし自  
時以來至今日經六十歳といふ事を知るは天武天皇御世の三年  
卿もて年數合へり古人のおのづから神道と悟りて祈<sup>マ</sup>変<sup>マ</sup>せるゆゑ  
さう猪<sup>マ</sup>居<sup>マ</sup>極<sup>マ</sup>さ<sup>マ</sup>真心の流<sup>マ</sup>お<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>免<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>也  
○一條關白兼良公へ將軍且利義尚公より政道の註要を乞賜  
らむと請ひし事なりて推談治要と題してきて甚じりし

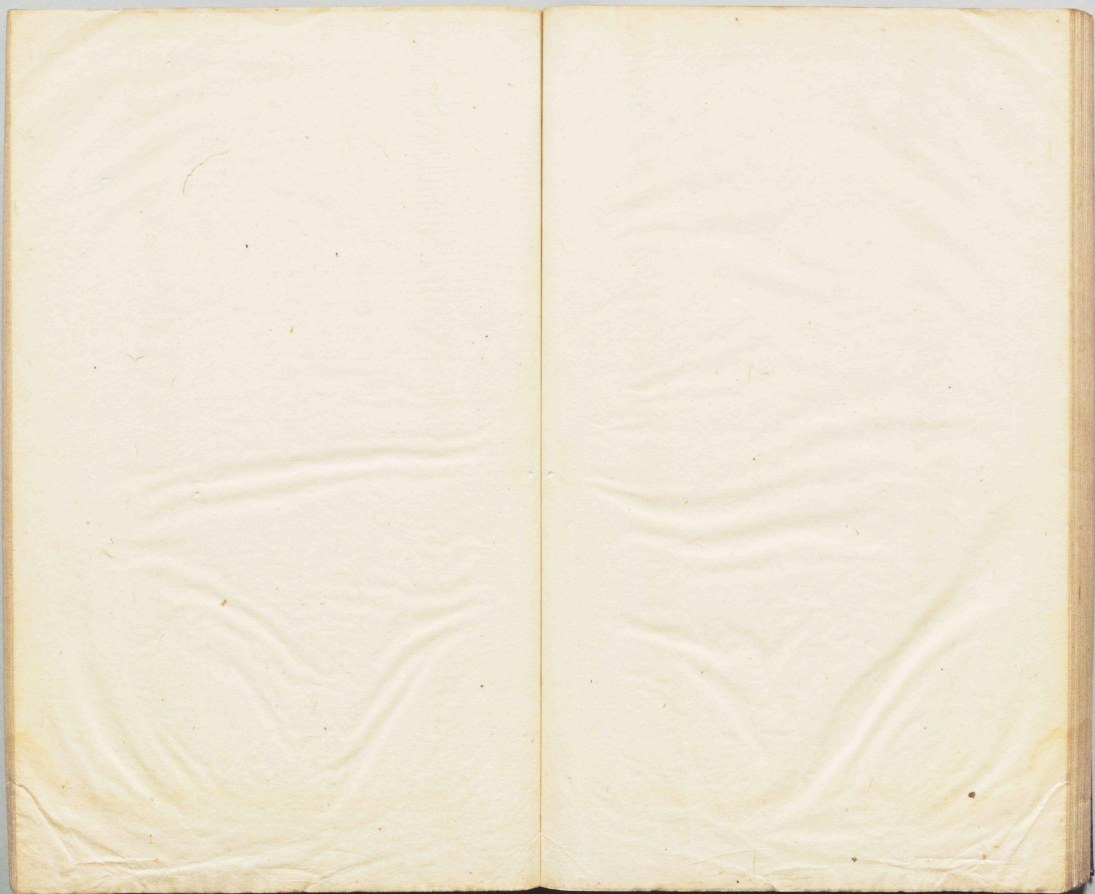
ちの中に此由奥古りの文明十年七月廿八日三關老人覺惠に記す  
て伊勢常陸記此書のみと文明の以帝徳院殿所記に  
て後成恩寺殿其書のみと其使果とあり是なり吾國は神國  
なり此公明三年四月二十八日又り覺あり

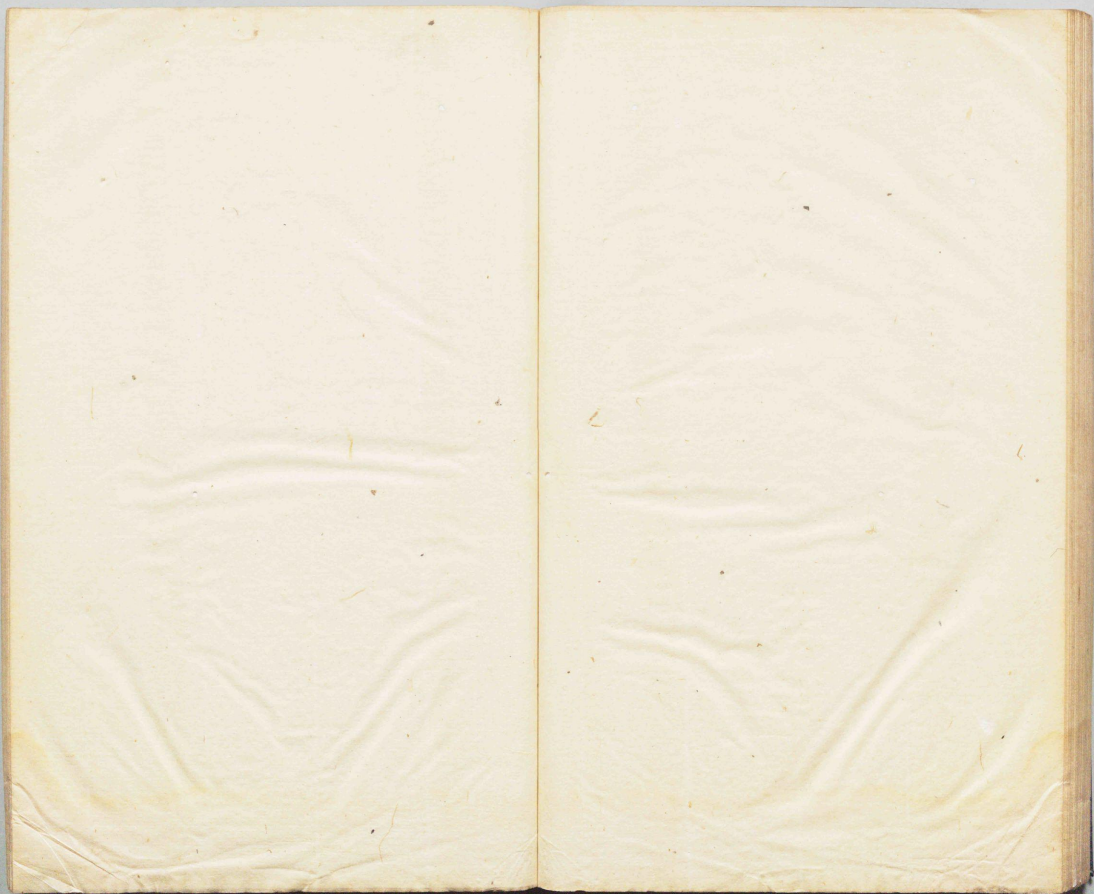
開闢











此古進の世より文明十年公義高公十六歳よりなり世の中いづれ  
 なる所なり此年より八年にのり長亨元年佐々木高頼を征むりて  
 近江の約里に陣し同三年三月廿六日陣中におりて廿五より薨りて其公陣  
 中におりて同長亨二年甲子前御東宮胤中帝幸常陸と撰賜のむす  
 を請ひより同三年撰調へて三月十日近江の陣中へ進らせり色なり  
 の日記をえたりと云皇胤紹運録なりかこ乱世の陣中におりて  
 皇統のやに心を用ひたり此公十六歳のひよりろ馬の藝を喜く文學に  
 心を用ひたりと云長亨二年甲子前御東宮胤中帝幸常陸と撰賜のむす  
 一人と云へりやに女と云へりやに文をえたりと云く薨りて  
 一人と云へりやに女と云へりやに文をえたりと云く薨りて

○本居宣長翁の曰職負令の神祇官ともうの官此始まづ

あけて信友曰神祇官人伯一人天副一人天祐一人少祐一人天史一人  
 子持統天皇三年紀三月乙巳奉幣於諸社丙午賜神祇官頭至祝部  
 等二百六十四人施布各有差なりカヨク云たりその頃前天智天皇の定り  
 令の行ふなりカヨク云たり天智五年に勅へ進ませ出雲風土記著に國の大  
 体及國守の雅以と云へりさてまづ國守の神社の總數と云たりと本のり  
 意りから  
 是より少小太政官と擧らまはる延喜式も同くは見え

神祇式次小太政官式より後の意を承けて北畠准后の職原抄を  
 一よりいひついでりれり方のよしをばり唐の國なりとありた  
 入りしは倭也一もかく有らざるに神祇倭也と云ふ事にして  
 いらり一もく是でははるふ事む有る世中八何ふたても  
 然らばいへともあたまなりぬまし是意式とて五十卷はして  
 始十卷ハ神祇式よりつれは朝廷天下れりなり公事もろこしのう  
 五分ハ一神事カミコトにぞしこれと以ても古神事カミコトのすのりとのま  
 きはく盛なり一むと云ひはれり一とらり一は意をばり神  
 祇をさしめしむと云はれて周の代よりと云ふべし一むらさ  
 ちにさるるむらむらと云はれしは神事カミコトの人のさるるむらむらに我國カミコト

方なれ思ひまひてさるる一かたや一いりもす。

○又曰朝野群載云初任國司廳宣可早進上神宝勸文事  
右件神宝或於京儲之或於國調之者且進上勸文且可致其勸  
又恒例神支配守式日殊可勤行矣云云云云廳宣但馬國在廳  
官人等仰下雜支一可勤杜恒例神支配右國中政神事為先專  
致如在之廳宣須期部内之豐稔云云云云國務存事云云初任國  
司の政務の次第云云云云一神拜後擇吉日時初行政事云云一  
擇吉日始行政務事神拜之後擇吉日可始行之云云古諸國  
一云云神科と云くせり云云云云の如く云云更科日記  
云云云云人云云神拜といふこと云云の由あり云云云云これ  
若系若禊の末國のふにありてありり許云云いせせらるる云

○敬雄云國司神科  
十古書云云云云  
○新初撰集云平泰時  
そそふ云云神科  
仍んふ云云神科

○卷臨集  
藤原云云神科  
源平盛衰記  
田代建者ト云云  
伊豆國司結任國  
父馬御奉朝見  
神拜下位云云  
○新撰史記云平泰時  
鎮即寺別文職之  
固也代五章七道云所不能

昔國司任國小下りては部内の神社にては治てしつと云云  
信友云此事の古き云云又云云の儀甚然に肥後國遊若槍  
垣垣老後落魄有也家集云任亦もとなりて水を置りて桶引

提出出にに固守神科小出り小道道云云のいふれ云云もも云云  
此此文の神科と善也也顯輔集集云云加賀守守云云神拜拜云云云云  
又東守守之所歳年古来来也也の中中に維元永二年年記九月十六日日當國

鎮守正一位出雲西所大明神宇豆廣前仁國司正四位下行周  
防守藤原家保忍美忍美毛令申事由波去年七月廿九日  
但馬國与利當國仁遷任令月十三日入境着府即官鑑乎受  
鎮任天種多御神密物乎調作天今日御神拜乎行  
固也代五章七道云所不能

○庭河住来三月廿二

今境著任之儀云者

府史著之儀云者

并宮に奉幣云云

先例毛爾也也

○津守御基果

○候御花集

又り云々

○万代集

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

○長明後心

○海平聖名

布、其修宝物弓二張云、式に佐藤部出雲神社二座

○敦利河内守左大臣下向其下可  
本堂に奉幣云々神子奉幣奉幣奉幣  
○改定して奉幣云々而下二座云々

と云ふ業ありと云ふ事、すなはち藤原隆信朝臣集心業云々、以てけ

るよし、父とよせのうみあて、ててて云々、国とて神とのなむけを

るめをせせりえり、ありと云々、まふとてて云々、とてええり、神

のなむけを、そのおほい、例の執りて、吉部松訓抄

小建久三年八月廿三日、神社造営、国司可著諒園装束、否、又、つう、平原師

尚請文、よ、未、神、拜、国、司、著、諒、園、服、云、之、由、見、田、記、又、中、原、師、直、請、文、

未、神、拜、之、国、宰、不、輝、凶、非、自、神、宝、造、始、之、且、著、吉、服、神、事、訖、之、後、著

諒、園、服、と、わ、り、も、国、守、必、神、拜、と、も、定、と、し、て、る、故、に、不、標、目、私、考、の

未、國、内、神、名、帳、の、と、論、へ、と、著、陸、奥、守、堆、叙、朝、臣、国、中、神、拜、の

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例

と、と、記、せ、り、に、合、せ、と、し、式、内、は、つ、て、式、外、の、神、々、と、拜、巡、と、し、例



の支台記東鑑より其録の記録ともにも臣家の奉幣あげての  
へりし或は此制ハ上代より行はれし漢意とて今世の如く上  
世よりその後の制りし皇国の意とて今世の如く上  
一人より下庶人よ至るまで皆修しり奉幣参拜せしむる  
大御神の御心よりあつたを、必也とて一度朝廷の制りし其制  
と守と感さぬ勿論とせしむる皆く非礼なりと既<sub>レ</sub>數百年來もの  
制やがも來まとも更上よりこれを怨えりよとも下同一の  
よりひとかりぬる今更これと私<sub>レ</sub>禁<sub>レ</sub>む感さぬも然<sub>レ</sub>かぬ物と  
あつたやかりぬるも至<sub>レ</sub>中大御神の御心よりあつた物も知りざし  
今の時ハ天下こしく大將軍の制令に從<sub>レ</sub>其大將軍にも毎

奉幣物と奉りし大將軍の制令を身より天皇に御政ありし  
これ背きて私の奉幣と非<sub>レ</sub>せむ<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>皇朝の政も背く理と  
いふこと記せり信友之の<sub>レ</sub>内宮あべての神社と別<sub>レ</sub>高天原  
かして天照大御神の皇孫尊<sub>レ</sub>の由と授賜<sub>レ</sub>了神物ありと  
やして大御神の御<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>として天皇に大宮<sub>レ</sub>齋<sub>レ</sub>崇<sub>レ</sub>せしむること  
崇神天皇の御<sub>レ</sub>神威と畏<sub>レ</sub>みりて伊勢の今<sub>レ</sub>大宮に遷<sub>レ</sub>奉り  
祭<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>天皇<sub>レ</sub>大宮<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>奉り  
王臣以下の人のみより<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>事  
よ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>び<sub>レ</sub>敬<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>真<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>大  
前<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>とも<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>あり

つゝ物とららけは漢風と云うの事、一や法世と云ふてこととの理と云ふ  
して礼と云ふことと云ふこと、二王臣以下の幣と禁をりたるもの  
やと云ふことと云ふこと、三死らぬもの其と禁をりたる制をりたる  
ものも云ふこと、四但し外宮は神の内宮と云ふことと云ふこと、五別をりたる  
もの、六故の故と云ふこと、七同等と云ふこと、八例と云ふこと、九後内  
宮と同じこと、一〇私の幣物と禁をりたるもの、一一或は  
説つるや、一二或は云ふこと、一三或は云ふこと、一四或は云ふこと、一五或は云ふこと、一六或は云ふこと、一七或は云ふこと、一八或は云ふこと、一九或は云ふこと、二〇或は云ふこと、二一或は云ふこと、二二或は云ふこと、二三或は云ふこと、二四或は云ふこと、二五或は云ふこと、二六或は云ふこと、二七或は云ふこと、二八或は云ふこと、二九或は云ふこと、三〇或は云ふこと、三一或は云ふこと、三二或は云ふこと、三三或は云ふこと、三四或は云ふこと、三五或は云ふこと、三六或は云ふこと、三七或は云ふこと、三八或は云ふこと、三九或は云ふこと、四〇或は云ふこと、四一或は云ふこと、四二或は云ふこと、四三或は云ふこと、四四或は云ふこと、四五或は云ふこと、四六或は云ふこと、四七或は云ふこと、四八或は云ふこと、四九或は云ふこと、五〇或は云ふこと、五一或は云ふこと、五二或は云ふこと、五三或は云ふこと、五四或は云ふこと、五五或は云ふこと、五六或は云ふこと、五七或は云ふこと、五八或は云ふこと、五九或は云ふこと、六〇或は云ふこと、六一或は云ふこと、六二或は云ふこと、六三或は云ふこと、六四或は云ふこと、六五或は云ふこと、六六或は云ふこと、六七或は云ふこと、六八或は云ふこと、六九或は云ふこと、七〇或は云ふこと、七一或は云ふこと、七二或は云ふこと、七三或は云ふこと、七四或は云ふこと、七五或は云ふこと、七六或は云ふこと、七七或は云ふこと、七八或は云ふこと、七九或は云ふこと、八〇或は云ふこと、八一或は云ふこと、八二或は云ふこと、八三或は云ふこと、八四或は云ふこと、八五或は云ふこと、八六或は云ふこと、八七或は云ふこと、八八或は云ふこと、八九或は云ふこと、九〇或は云ふこと、九一或は云ふこと、九二或は云ふこと、九三或は云ふこと、九四或は云ふこと、九五或は云ふこと、九六或は云ふこと、九七或は云ふこと、九八或は云ふこと、九九或は云ふこと、一〇〇或は云ふこと、

五カツト云々 神社の事云々トイハル

○又曰 公式令は大社の号ハ關字の例不出たりなり云々

同云々 神社ノ表ハナゲカハニシテ

○又曰 古くは世の中ハ類ハシキニシテ、一ハシキハシキノ神社ヲ表トシテ

同云々 和泉国大鳥神社トイハル

○又曰 和泉志といふ書ハ大鳥神社の事ヲ云フ

同云々 神ヲナサリニ思ヒ世ヲナラカサレテ

○又曰 世の人ノ神と云ふは、一世ノ人ノ神ト云フ

同云々 世人ノ神ト云フ物セタルヲ云フニトスル

○又曰 今世の人ノ神の社云々、一物云々ト云フ

同云々 大御神ノ宮殿の事云々ト云フ

○又曰 伊勢ノ大御神ノ宮殿の事云々ト云フ

同云々 神社ヲ宗廟社稷ト云フ

○又曰 世ノ大宮と宗廟と申シハ、一宗廟ト云フ

同云々 神社ノ祭ル神ヲ知ラセラル

○又曰 古クは神ト云フハ、一神ト云フ

同云々 己カハ奉ル神ト云フ

○又曰 中昔ト云フハ、一神主祝部ノ事ト云フ

同云々 又曰 日事代主神と建御名方神と、一是レハ大國主神の神子ト云フ

四六二 内郡神道トイハズ

○又曰大(一)天下凡神社中昔より不慮しのつゝふか多しあることなま

四六三 内郡唯一トイハズ  
○又曰内郡とも仏のそとに密教の胎藏界金剛界の内郡ともいはず

四六四  
○又曰古き神の社此余れ絶つて又絶つぬもつべしなり

○大友記云南蛮國より三つをよんて宗旨こりて

○本居公羽の故ありて記すもその中云天の下に神社古むら

朝廷より在るをその宗旨とせり

○大友記云南蛮國より三つをよんて宗旨こりて。府内丹世島

一寺と建立し。や宗旨とて。清田鎮忠田原近江守。徳宗とて

日夜聴聞し。宗麟公にせり。をいはずとせり。吉利支丹宗の義

身ゆかり。近郷九曲の赤支人あり。吉利支丹外そのあ細とて

面白くことかたりき。宗麟公に仰む。頼朝公の仕置し。神

をまつたし。身下るなり。大法多し。某も此中を渴仰も。神

とて。のちかくして。世の福多し。諸寺多し。社と破却せり。外道宗并

あり。せんをかり。かす。のち。吉利支丹とて。あり。多し。年國

中の社字人。義録公を調伏し。あり。此儀。此身。主。大。に。は。ん

為。り。武運。武久の祈禱。を。こ。む。は。ん。と。さ。ん。く。し。七。萬。と

調伏せしむ。手ぐひの犬よとねを食うをうん。まこととくをむとて  
悪くももや、か狂の歳へ。一人も残さば死罪を行はしむ。し仰せし  
々れと。吉岡宗觀止先事。佐領内と稱。宗麟のまことなりと不  
敬して。吉利文舟、あつりしむをすべし。豊後國の鎮守由須來八幡宮  
乃佐神事も毎年八月酉より明ら十五日まで放生會ひ祭よ。上古より  
兩行る。今年も恒例をなすと。八月酉午の刻。由須祭よりいへし  
の候かへんの候。佐幸とせす。器見物の芝妙巻と亮脚しとせ  
し。佐觀くす。さしをねのへくす。恐怖ありしことあり。御輿  
候にまくだし。せりより大層危れやくよと。佐輿の御前に土塵よ  
落り。まおさもと。供儀西邊とあげせらる。と。まらも。散

動さる。如何せむとあらぬか。舟。老僧入所處のあたに畏る。三度有  
をかけた。活圖とて。佐神と申須是選挙とせし。ちりし。おが  
か。ぬか。ふ。佐神と申。為体宗麟と申。上。屋形三。一あり。  
さて。女。の降。り。なる。ふ。と。仰。ま。さ。な。の。危。但。お。れ。と。止。ん。  
去。り。水。く。止。先。ん。の。危。ひ。く。夫。祭。ハ。豊。平。と。不。撥。凶。年。も  
不。滅。と。と。す。ん。に。上。古。う。は。し。開。く。舟。む。り。の。祭。れ。と。は。ひ。と。て  
水。く。捨。り。り。ま。神。慮。と。い。つ。と。は。り。が。あ。く。と。お。は。り。宗。麟。と。夫  
似。神。ハ。末。宗。此。魔。と。也。ハ。國。中。の。大。寺。大。社。一。半。も。の。こ。に。破。却。せ  
と。わ。て。一。番。に。住。吉。大。明。神。の。後。社。上。衣。紹。庵。平。津。御。舟。紹。庵。池。家  
燒。拂。ひ。玉。体。ら。く。押。り。お。ち。つ。も。紹。庵。三。日。と。も。死。ん。ん。水。に

豊前の彦山。清田鎮志に三千の人数と相傳つる。山中三千の  
山伏。身命と捨て防ぐとて。も。死生不知の隘者。弓銃炮と珍。貢  
入り。山中の衆徒。山と谷へ逃散り。鎮志。上宮まで攻上り。守も  
残。も。所煙とみ。か。り。山伏。二人。高聲より。大。七。代  
ア。の。怨。靈。と。り。て。罵。罵。り。て。腹。う。り。極。火。の。中。に。籠。入。り。  
さ。り。し。万。壽。寺。破。却。の。承。り。橋。本。正。行。ま。て。か。の。寺。へ。行。向。い。山。門  
を。も。少。と。り。界。一。斤。の。煙。と。も。ご。れ。其。怨。り。や。り。正。行。俄  
に。垂。病。と。う。け。病。と。て。血。に。あ。り。終。り。あ。が。り。死。な。か。り。り。り。  
古。弘。内。藏。取。国。中。の。仙。神。新。ま。せ。と。仰。旨。と。り。山。に。在。り。走。り  
包。て。仙。神。の。尊。容。と。日。に。五。獄。十。終。死。と。り。せ。お。り。新。と。り。り。界。中

雷。む。の。の。動。搖。て。や。う。け。を。燃。え。さ。り。一。つ。を。れ。を。石。を。燃。え。り。  
し。と。魔。風。始。と。吹。り。も。極。火。既。に。盛。り。て。餘。煙。十。方。に。覆。れ。れ。心  
つ。り。り。内。宿。也。周。章。や。り。な。さ。出。む。と。り。に。外。方。と。先。ひ。身。と。り。て。  
終。り。燒。死。と。り。野。又。曰。宗。麟。公。怨。人。數。三。万。五。千。の。著。到。り。天。正。五。年。戊  
寅。八。月。中。旬。平。府。内。と。は。な。り。先。戰。場。に。向。ふ。門。出。り。由  
須。原。八。幡。宮。兵。一。節。奉。と。り。有。り。足。輕。三。百。お。り。弓。銃。炮。と。硝。へ  
射。り。け。を。も。さ。て。又。と。為。さ。所。と。り。仙。神。の。尊。容。と。取。り。是。と。踏。  
を。り。前。代。未。開。け。為。り。り。高。越。後。守。師。春。ヶ。石。川。河。原。の  
陣。と。り。楠。と。攻。り。内。惡。逆。死。を。の。者。と。塔。の。九。橋。と。下。り。鐘。子。と。鐘。  
や。り。後。延。文。四。年。の。夏。の。以。富。山。入。道。ヶ。楠。と。攻。り。時。で。奴。と。も。藏。

て。神社仲閤に乱入戸帳を下り。神宮を奪て。狼藉餘て不拘制止。  
 獅子駒犬より割て薪とし。仏經卷と書て。奥鳥と書り。是れと人  
 師恭が嘉行。音倍て。希代の羅業々々と書り。是れ禊とれ。ハ  
 千倍せり。後禊とつと。おろく。此軍宗禊公。又宗禊公。宗長戸次  
 道雪名。鑑連。筑前守。在。海。上。は。禊。公。の。諱。言。と。載。た。く。中。に。先。宗。徒。の。氏。方。と。こ  
 れ。の。子。孫。を。宗。禊。と。書。す。分諱言と載た。く。中。に。先。宗。徒。の。氏。方。と。こ  
 始中。志若男女ともに南。宗宗とやらん。む。せ。ま。寺。社と破却あり。  
 仏神と或。八川。入。成。公。新。と。や。前代。末。閤。の。氏。孫。傳。と。さ。の。や。せ。め。の。正。よ。  
 是。公。平。度。か。つ。り。や。氏。孫。の。氏。分。も。と。つ。く。其。の。中。に。宗。禊。を。放。て。住。古  
 以。來。近。年。ま。じ。他。の。跡。なく。寺。社。願。願。く。宗。禊。の。人。治。の。と。普。く。承。り  
 たり。中。に。利。口。と。さ。す。中。に。宗。禊。の。氏。孫。を。以。降。所。傳。神。之。加。護。先。之。受

理正。諸。子。翁。と。さ。れ。れ。と。く。中。傳。は。と。て。本。條。も。神。社。仏。寺。の。所  
 抄。伝。と。く。家。に。と。ま。と。載。り。ま。ゆ。之。余。結。句。は。神。と。薪。と。あ。る。れ。ど。古  
 巻。に。は。日。五。湖。の。吾。も。と。分。別。し。及。び。ず。と。い。唯。日本。八。神。國。と。申。候。言。  
 是。非。公。私。信。心。あり。て。專。順。宗。を。む。り。れ。ど。天。通。の。様。法。覺。傳。ら。る。  
 宗。禊。の。氏。孫。宗。禊。を。存。り。の。傳。と。さ。す。信。友。云。此。乃。友。記。宗。禊。の。氏。孫。  
 妻。と。互。り。の。符。を。の。國。人。の。い。と。う。と。さ。さ。さ。さ。く。又。さ。さ。さ。さ。り。宗。禊。の。大。在。堂  
 前。守。原。能。直。と。て。賴。朝。公。の。落。鹿。ら。る。且。十八。代。に。宗。禊。は。左。衛。門。督  
 義。鎮。と。い。ふ。宗。禊。の。氏。孫。も。宗。禊。と。改。た。り。能。直。堂。前。在。後。南  
 西。と。稱。あり。て。豊。後。所。由。に。在。任。して。し。り。世。と。を。在。九。代。の。孫。親。と。い。つ  
 中。に。九。代。の。孫。親。と。い。つ。れ。て。宗。禊。の。氏。孫。と。い。つ。れ。て。豊。後。の。死。肥。六。ヶ。團。の。孫。親

まて社一なり。宗祇が代は國衰へ。世子義統が代。お家がともに失へり。  
そのしつこくして人の惡むは。のぼやく候ふて。深く禁たり入れ。  
いむのまて。そと宗祇が代。お家を信して。己が願われ。神社をこし。  
奉まじり。よも乃びたり。さりとて。せむふんり。前との亂世。  
その宗旨の入息も。此國の中。ふつ。ふつ。おもむき。に神佛と輕きを  
なり。は。此世で。社の衰へ。もあり。し。人。も。惡む。を  
邪宗を。なり。今。何を。何。れ。と。ある。仏の。宗旨。の中。は。ど。が。仏の。こ。も  
じて。神。と。せ。ば。さ。ら。な。ら。ぬ。由。と。い。は。れ。神。社。は。つ。つ。も。と。も。も。も。  
あつ。と。こ。も。ま。も。又。ふ。ら。む。べ。

愛 知 県



1103251949